

No. J2304 戦後日本社会の国民再編成過程における「引揚者」の主体形成の ポリティクスー満洲からの「引揚者」を中心にー
名古屋大学 研究員 劉 コウ
本研究は法制度・社会的言説・個人的実践という三つのレベルにおける語られ方に着目し、戦後日本における国民再編成の中で、「引揚者」という社会的カテゴリーがいかに関形成されたのか、すなわち「引揚者」の主体構築のプロセスを考察するものである。活動の1年目は引揚事業に関する行政資料、引揚という出来事や引揚者たちの在外財産補償などに関する新聞記事を中心に文字資料を収集してきた。前年度に続き、活動2年目は個人的実践というレベルを中心に検討してきた。地域社会に日々の日常生活を営んだ引揚当事者たちの手記や、当事者団体の会報などの文字資料、引揚体験の語り部への参加や当事者本人とその家族への聞き取り調査をとおして、公文書や新聞記事と比較検討しながら分析を進めることができた。 具体的には、引揚をめぐる記憶とその継承について、日本国内各地における引揚関連モニュメントの設立経緯や慰霊祭の開催などを分析し、帝国崩壊後植民地などの地域から帰還した人々が日本社会においてどのように引揚者として戦後生活を再建していったのかを考察してきた。とりわけ主たるフィールド調査地を、岐阜県白川町（旧満洲黒川開拓団の母村所在地）と「引き揚げのまち」と呼ばれている舞鶴市に設定したうえで、それぞれ調査研究を行った。それにより、引揚者の戦後史は単なる当事者側の生活世界の提示だけでなく、長い戦後生活のなかでの社会的位置や独自の記憶をめぐる自己と周囲とのダイナミックな交渉史としてとらえられる必要がある。そこからは、日本国民という集合体内部における、戦争被害をめぐる競合や記憶の継承をめぐる協働などが読み取れる。